

第1回 ことう地域チームケア研究会



彦根市立病院 医療情報センター
多目的室

平成25年3月19日(火)

グループワーク

- 講演を聞いた感想・もっと知りたいこと
- 今、私たちの取り組んでいること

など

- 看取り: 家族が「まだ治るのではないか、病院へ連れて行って」と言う
- うまくいったケースは、家族の在宅で看取るといふ強い思い
- 支援者も共通認識できている
- かかりつけ医・往診していただける医師が増えるといい
- 在宅で看取りをするよさ・時代が来ている
- 住民への啓発→行政が提供する必要性

- 看取りを経験した人が少ない(若い世代)
- 何もしないということ: ケアは何かしてあげる
仕事の中で、何もしないことへのつらさにどう
向き合うか
- 看取りをする、家族と話すことの大切さ
- ケアする職員 看取りケアをした職員から話を
聞くこと大切

- 看取りたいという相談より...入院・入所を希望のケースもある 「不安」や「大変」があるのでは？

施設でよい看取りができた事例ある。

- 家族の強い気持ち、親戚など周囲も含めた覚悟
- 在宅医療をしていただく医師の負担軽減
- 住民の理解
- 独居・高齢世帯への支援をどうしていくか課題

- 薬剤師・介護職の意見交換ができた
 - 薬剤師さん：研修会を開催し、介護・医療の一体化を目指している
- 介護の現場が十分見えていない...
- 現場で自宅での看取りの不安がある
 - 家族も在宅看取りを知る必要性があるのではないか

- 最後の希望を誰に確認しているのか
- 本人の希望が聞けていない 家族に聞いて支援している現状 家族が病院・施設を希望
- 往診医の不足(特に山間部) 介護サービスだけでは限界
- デイサービスでの受け入れ困難 支える側の在宅看取りをする覚悟と看取った達成感
- 看取りの啓発が大事

- 家族の揺れ動きへの対応
- 状況変化への対応に不安がある
- 施設職員 受け入れ体制について話し合っている
- 在宅看取りに慣れていない看護師 モニターがないと不安
- 死のプロセスの理解の促進をしていく
- リビングウィルの啓発が必要
- 支援者が腹をくくる

- ターミナルケアをこれから学びたい
- 認知症 本人に意志を確認しづらい 家族への確認
- 施設から病院へ まだまだ多い
- 地域でなくなることのネック 検死になったら...と不安
- どう支えるか その時その時に誰が伝えるか 訪問看護の役割
- どう生き、どう死にたいか 住民啓発が必要

- 施設 看取りをするかどうか確認するのに入所時に紙面で確認 本人・家族の思い
後から身内が「病院で」となると、施設での看取りができないケースあり
- 家で看取るには介護力が重要
- 訪問診療（往診） すぐに来てもらえると、うれしい